む広場

毎日俳壇

小川　軽舟　選

雨つづく二日見ぬ間の胡瓜かな
奈良市　奥田　誠

△評▽「世の中は三日見ぬ間の桜かな」をもじった。果たして畑のキュウリはどうなっていたか。想像するとほのかにおかしい。

コップ酒屋台に呷る夜涼かな
高山市　直井　照男

△評▽行儀のよい酒ではないがこれが性に合うのだ。すっと風が吹きぬけるのもうれしい。

素足なり老いも若きもフラ踊る
京都市　古川麻美子

室外機あまた唸れる暑さかな
仙台市　伊藤　和彦

リュックよりバーナーとハム登山小屋
東京　嶋田　恵一

梔子の花匂い立つ雨上がり
三条市　高橋　実子

イエメンの珈琲の香や釣忍
大阪　福田　愛

納骨を終えて金魚に餌をやる
松山市　三木須磨夫

また来いと手を振る父や青田道
倉敷市　蒲　公英

公園の鳩に餌やるサングラス
草加市　田坂美智恵

西村　和子　選

笑ひ声耳を離れず初盆供
横浜市　斎藤　山葉

△評▽新盆の供養をするにつけても、亡き人の笑い声がよみがえる。作者の人生を明るくしてくれた声であろうことがしのばれる。

ペディキュアは青サンダルは白と決め
狭山市　小俣　友里

△評▽足指の爪を塗りながら、映えるサンダルの色を思う。夏のおしゃれ心とときめき。

焼香の煙は低く梅雨に入る
土浦市　今泉　準一

涼風や耳を撲る波の音
横浜市　相沢恵美子

快音は入道雲の辺りまで
宝塚市　蒲　火妙

人声の届かぬところ岩清水
京田辺市　加藤　草児

水の上に飽きて草の上通し鴨
西東京市　永島　忠

羽搏いて見せたるばかり通し鴨
岸和田市　妙中　正

木苺に隠れて石の道標
和歌山　馬谷富貴子

初蟬や夕影青き大欅
山形　佐藤美和緒

井上　康明　選

わが影の濃き原爆の日なりけり
八街市　山本　淑夫

△評▽自らの影に、原子爆弾の一瞬の閃光と多くの死者、地に焼かれた影を想像したのである。8月6日の広島を思った。

開くとき崩れさうなる書を曝す
甲府市　村田　一広

△評▽江戸時代の掛け軸だろうか、ぼろぼろに劣化している様子に、夏の終わりの風情がある。

期日前投票にゆく梅雨曇
みやま市　紙田　幻草

夕焼は雲を呼びあふ山の影
甲府市　清水　輝子

クレーンの伸ぶる泰山木の花
柏市　斎藤　天水

帰省子や戦の国を迂回して
奈良市　奥　良彦

蓮浮葉頭上を雲のながれけり
宇陀市　泉尾　武則

水船に色鯉を飼ふ郡上かな
町田市　枝澤　聖文

蟻生まれ変はるや薄羽蜉蝣へ
小平市　中澤　清

山女魚釣る鱒二・龍太の栃代川
東京　徳原　伸吉

片山由美子　選

夕立の去り島ひとつ生まれけり
伊賀市　菅山　勇二

△評▽世界が生まれ変わったかと思うほどの激しい夕立だったのだ。もとからあったはずの島も初めてみるかのような新鮮さ。

拝啓の後の続かぬ暑さかな
つくば市　小林　浦波

△評▽拝啓と書いてはみたものの先へ進まない。それを暑さのせいにしているのがユーモラス。

監督の顔になりたるサングラス
柳井市　植野　史理

職引いてよりの多忙や夏来たる
宍粟市　宗平　圭司

玄関が二つある家立葵
鎌ケ谷市　海野　公生

蟬声の止んで真白き真昼かな
神戸市　大岩　正彦

暴れ神輿金の鳳凰ゆさゆさと
上尾市　山口　流離

水眼鏡波にとられてしまひけり
狭山市　小俣　友里

もう口に出す気も失せし極暑かな
加古川市　伏見　昌子

鰯雲校庭走る遅刻の子
東京　永井　和子

うたは奏でる　生活者のリアル

染野太朗

今日は終戦の日。佐々木剛輔歌集『〈新版〉棄民』を紹介したい。本歌集は佐々木の既刊歌集『棄民』と『満蒙開拓国策愚か』をまとめて文庫化したもの。1934年生まれの作者が8歳から12歳まで過ごした旧満州（現中国東北部）での体験を中心に、作者の満州にまつわる歌を収録する。「棄民」とは、政府によって切り捨てられた国民という意味。終戦後の日本政府は満州に住む者を現地に留まらせる方針をとったが、それに対する作者の強い感情がこのタイトルに滲む。

・国策の満州開拓に父はのり幾多の罪を詫びつつ逝きぬ

歌集冒頭の歌。「開拓団」の一人だった父の罪悪感を詠む。その父の魂を鎮めるかのような歌が本歌集には並ぶが、この歌集の凄みは、タイトルや右のような歌に込められた、引揚者としての感情や思考の表現にばかりあるわけではない。

・熱湯に下着を浸すたちまちに黒き虱は白くなりたり

この一首は本歌集に並んでいなければ満州の歌とは読めない。しかし生活の臨場感は紛れもない。こうした歌があるからこそ他の歌に表れた作者の感情や思考がリアルな手触りを得るように思う。

・「満州」の地図を写して赤く塗りき外は吹雪なる放課の時間

学校の歌。日本人として無邪気に赤く塗り潰す様子が悲しくもあるが、何より「吹雪」という場面が読者の心身にも厳しく寒々とした体感を与えるだろう。

戦後すでに78年。戦中戦後の歌の生活者のリアルを、改めて読み直したく思った。

（そめの・たろう＝歌人）